慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森田鉄郎著 ルネサンス期イタリア社会
Sub Title	
Author	松浦, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.8 (1967. 8) ,p.988(154)- 990(156)
JaLC DOI	10.14991/001.19670801-0154
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

担からの解放を意味した。……彼の科学としての社会政策の積極的内容を構成するものは特に独占資本制のもとにおける巨大経営のための熟練労働力の培養、その陶冶への関心であり、大経営における労働過程の自然科学的実験調査、約言すれば社会政策論の労働科学への転化であった。すなわちマックス・ウェーバーにとっては、科学としての社会政策・経済政策は、帝国主義段階における世界市場獲得のための経済的・社会的条件を「没価値的」に検討すること、すなわち手段の適合性を検討し、その結果を予め測定し、そしてまた随伴的諸現象を考慮することを、その課題となすべきものであったのである。ウェーバーの没価値性論の積極的な面は、このように世界市場をめぐるドイツ独占資本主義の経済的、特に社会的要求との関連において、歴史的・必然的に規定せられたものであった」（一〇一頁）。まことにきびしいウェーバー批判ではないか。このようなウェーバー批判の上に立って、さらに大河内教授の社会政策論にたいする徹底的な批判を、第一編第二章第三節社会政策における生産力説批判の課題および第四節社会政策の本質把握の問題――方法論争の展開、のなかで展開している。社会政策論に関心を有する諸君の熟読をおすすめする。（未来社、一九六七年三月刊・A5・三九六頁・一、六〇〇円）　―飯田　鼎―

＊　＊　＊

森田鉄郎著『ルネサンス期イタリア社会』

この本は、これまで世界の多くの歴史研究者が幾度となくとりあげ、しかも定説を確立することができない「ルネサンス期の歴史的特質」という問題を、従来の諸研究を網羅的にとりあげて検討批判している。そればかりではなく、この本は、その社会的な背景と結びつけながら、ルネサンス期の歴史的特質をうきぼりにするという新しい角度からの分析を企てた労作でもある。

まずこの本はルネサンスとはなにかという問題提起をめぐって、ブルクハルトの古典的な研究をはじめ、最近の研究者をもふくめた多くの歴史研究者たちの主張と論争とを回顧

反省し、文化史的な角度からルネサンスの時代づけや本質の解明がいたずらにこの論争を混乱状態におとしいらしめていることを指摘して、むしろあまりにも多様である文化現象の具体的な諸相からはなれ、社会経済史的な角度から時代社会の構造にふれて、その中世社会や近代社会との異質性もしくは同質性を検討してみる必要があると考える。

その立場から、ルネサンスの社会経済史的背景をかたちづくっているイタリアの社会・経済的局面の分析をおこなうために、この分野における従来の研究を紹介し批判する。そこではいろいろの論点がえぐりだされているが、その主要な論点は、通説として、イタリア中世都市の繁栄が経済的基盤となって、ルネサンス文化がうみだされたと考えられてきているが、はたしてこの主張は正当であろうか。そしてこの繁栄の基礎に資本主義の萌芽をみいだそうと努める主張があるが、そのような見解はゆるされるであろうかという疑問である。たとえば一五―六世紀の経済衰退期にルネサンスの興隆がおとずれたことを知るとき、むしろ退嬰的な商人像のなかにルネサンスの文化現象を把握することができ、これは通説に対する有力な反論となりうるであろうし、またルネサンスを資本主義の萌芽的な歴史的展開であるという見解に対しては、そのような先進性をもっていたイタリア経済がどうして一九世紀の後半まで、すなわちリソルジメント期まで近代化がおくれたのであろうかという疑問をさしはさむこともできよう。つまり先ほども述べたように、ポーポロ・グラッソ（あぶらぎった市民）という呼び名が物語る退嬰的な商人像のなかにルネサンスの文化現象を見いだすとき、そこに近代的な産業人の姿を想像することはできず、むしろこのことは、当時の経済の本質が決して近代資本主義の基盤にたっていなかったどころか、その方向にさえむかっていなかった事実があったがゆえに、その後の経済的な発展が阻止されてしまったといえるのである。

このような疑問をあきらかにするために、ルネサンス期における北部および中部イタリア諸都市の工業的繁栄を代表する産業を毛織物工業と絹織物工業と考えて、これら工業のなかにはたして資本主義的な萌芽を見いだすことができるであろうか、そしてこれら工業がはたして資本主義への傾斜を示していたであろうかについて検討している。その結果、もっとも資本主義的な性格をもっていたと考えられているフィレンツェの毛織物工業と絹織物工業についても、資本主義的産業とよぶ要因は存在せず、むしろギルドの強い枠組にしばりつけられたものであり、そのような規定は不当であると述べ、ましてフィレンツェよりもギルド的な手工業性を強く示していたほかのイタリア諸都市の織布工業は、資本主義的産業とよぶ状態からほど遠いものであったと述べている。さらにもっと積極的に、イタリア中世都市の織布工業は今日の資本主義の形成とほとんど共通性をもたないものであるとも主張でき、そのような理由があったからこそ、その後のイタリア経済は一九世紀の後半まで衰退の一路をたどっていたと主張している。

ここでこのようなイタリア中世都市の繁栄とその後の発展をはばんだものはなにであろうか、すなわちイタリア諸都市の工業が高い生産力をもちながらも中世的なギルド的性格を脱皮して、近代的産業に転化しえなかった原因はなにであったかという問題が生ずる。それはイタリア社会の特殊性に根ざしているとみる。というのは、そこでは古代以来の伝統的な都市国家体制のもとに、農村地帯が都市の支配圏のなかにあり、都市と農村のあいだには二元性がみられず、都市がつねに地方の諸勢力の中心でありつづけた性格が、農村社会において農業の商品生産化をさまたげ、停滞化させてしまい、その結果、首都的な都市やそのなかに存在するギルドの中世的な拘束をはねのけて近代的な繁栄をになう新しい要素が農村社会に生いたってくる過程が閉ざされてしまったからであると分析している。

さて、わが国において、ややもすれば、ルネサンスを単純に人間解放＝近代化というかたちで、きわめて一般化された観念的な図式で理解する風潮があるが、そのような見解がきびしい歴史的分析において、いかに浅薄なものであるかをこの本を一読して知ることができよう。同時にルネサンスにおける現象が、中世から近代への歴史的推移のなかで、その一般的な傾向をさきがけた現象として理解す

ることはできず、むしろイタリア社会の特殊性を反映した個性的現象であることも把握できるのである。（吉川弘文館・昭和四二年二月刊・A5・三四一頁・八〇〇円）

—松浦　保—

＊　＊　＊

大来佐武郎編
都市開発講座1
『地域社会と都市』

最近の学界の特色の一つとして、アカデミックな世界とジャーナリストの世界との接近をあげることができる。ジャーナリズム、或いはより端的にコマーシャリズムの寵児となっている一部の学者——この言葉も随分耳慣れたものになってきているが——を例外としても、現在、多くの研究者がジャーナリズムの世界と接触を保ちつつその研究を進めている。広義の意味での情報伝達という機能を研究者がもっていることからいって、この傾向は不可避的なものであり、専門の研究者による事実の発見や理論の構成が一般の人々に広範かつ急速に伝達されるということを考えれば、むしろ大変好ましいことといってよいだろう。しかしながら、他方、ジャーナリズムの世界との結合は、研究者にとって、はなはだ危険な要素をも含んでいる。というのは、ジャーナリズムの世界とアカデミックな世界とでは、情報の伝達の意味——というよりもそこにおいて何が最も重視さるべきかという認識——が若干のズレをもっているように思われるがらである。前者において、情報の伝達は何よりも迅速でなければならないし、多数の人々に達するものでなければならない。いうまでもなく、この場合も情報は正確でなければならないし、少数の人々を対象とするものもあるであろう。しかしながら、ジャーナリストに対して、迅速と正確、多数の受容者と少数の受容者との二者択一をせまるならば、多くのジャーナリストは恐らく前者を選択するだろう。いうまでもなく、このことは、ジャーナリズムそのものの本質に由来するものでなく、むしろ現在のジャーナリズムと密接につながりのあるコマーシャリズム、ないしマス・コミュニケイションの機構

にその原因を求めるべきかも知れない。いずれにせよ、現在のジャーナリズムがこれらと切っても切りはなせない不幸な関係にあることは否定し難い。これに対して、アカデミックな世界における専門研究者に対するこの二者択一問題は、多くの場合逆の結果をもたらすであろう。多数の研究者が迅速と正確のうち後者を選ぶであろうし、又、彼等は、自己のもつ情報が多数の人々に達することを最終的に望みながらも、少数の然るべき受容者をもつことで満足すると思われる。すべてが望ましい形で行われれば、この情報伝達におけるウェイトの相違は何らの問題も生じないかも知れない。しかしながら、現実には、迅速が不正確、ないし拙速主義と結びつき、多数の人々を情報の受容者として期待することが、これらの人々に受け入れ易いアイディアと言葉を使うことに結びつく。ジャーナリズムの世界では、それがいかに適確に語られても、常にコンベンショナル・アイディアが基底となっているし、たとえ、それが、いかに事実とはなれようとも人々の耳目をそばだてるキャッチフレーズが必要とされる。

戦後の学界のもう一つの傾向は、政治ないし官僚の世界との接近であろう。いわゆる御用学者は何時でも存在したが、最近の傾向は少し様子がちがう。こうした表現を使うのは少々気がひけるが、この接触が「体制として定着化した」とでもいおうか。調査ないし諮問という形を通じて両者が一体化しつつあるように思われる。自己の研究の成果、見出された事実とその説明、そしてこれらにもとづくあるべき社会のすがたが政策に反映する意味でアカデミックな研究者の行政事務ないし計画策定への参加は、本来否定するべきものでないし、むしろ望ましいことであろう。しかしながら、ここにもまた危険な要素が潜んでいる。というのも、このあるべき社会のすがたそのものの意味、或いはそれを考える立場が、本来、政治家、行政担当官、そして研究者と三者三様夫々独自であり、微妙に相違しているからである。この場合もまた理想的三位一体を考えることは可能であろう。だが、現実には、これら三者の立場は冷静な目でみるならば、絶望的といってよい程はなれているといわざるを得ない。しかしながら、現実にこれら三者は協力している。そして、この協力を通じて、研究者は多くの場合、事実を政治家の目で見て説明し、行政担当官の処理の仕方で問題を解決し、計画を策定してゆくことに慣れてゆく。他方、政治家、とりわけ行政担当官はアカデミックな研究者との接触によって、専門分野におけるアカデミック・ジャーゴンを自家薬籠中のものとなし、「能吏」としての資格を一層強化させることになる。この結果、事実は明確に把握説明され、問題の処理は適格にそして計画はいよいよ精緻・周到になる。しかしながら、かんじんの行政サービスをうける人々、計画の実施によって生活そのものを変えてゆく住民の意見は何処にあるのであろうか。出発点において、三者が夫々の立場からサービスの受容者の福祉を考えていたことは事実であろう。しかしながら、皮肉なことにこれら三者の協力の過程において、それらは政治的思惑と官僚的能率、ないし機構の存続と多数のアカデミックな専門語の中に消え去ってしまったのである。

これら最近の学界における二つの特色は、その帰結として「アカデミックな官僚ジャーナリズム」の隆盛を生みだしている。本書は、そうした分野に属する代表作ともいうべきものといってよいであろう。執筆者は一流、そして内容も実態分析とその説明モデル、そして政策提案まで極めて充実している。しかしながら、これが果して実態か、適格な説明か、そして望ましい政策か、を考える段階に我々はさしかかりつつあるのではなかろうか。（鹿島出版会・昭和四二年五月刊・A5・二七〇頁・九八〇円）

—高橋潤二郎—